



御船美智子氏『生活者の経済』について

色川 卓男

1. 全体について - 私の理解 -

【前書と異なる点】

前書よりも、家計簿記帳など、いわゆる「家計」レベルの議論が減少したこと
それに伴って家計以外の「経済」の視点を加えた展開が増加していること
「家庭生活の経済」が「生活者の経済」に変化していること（基本概念の変化）
「経済」の基本的メディアとして「貨幣、時間、情報」を明確に提示していること
「生活者」概念の明確な使用

【前書と共通する点】

単なる「経済学」批判ではなく、「経済」批判であること
「生活経済構造」の把握形態は、ほぼ類似していること（三段階構造）
前書の体系は、基本的に踏襲されている

2. 用語について



「家庭生活の経済」と「生活者の経済」の違い

前書 15 ページと 233 ページから本書 44、45 ページの変化

「経済」の定義

「生活手段・対象の調達・管理」から「生活手段を整え続ける社会的枠組み」へ

3 . 検討点

「生活者」   

「多くの経済的役割・側面を超え、統合して生活を営む志向の自律的アイデンティティを持つ人」

「統合して生活を営む志向」 単なる企業戦士ではない人？


「自律的アイデンティティを持つ人」 自分をもっている人？


- ・ どうも社会に対するコミットメントの側面が弱い。どちらかといえば、「生活者」自身の生活を律する側面が中心か。

* 「生活者」という概念を設定しているレベル

「実証研究」での既存経済学との対抗

生活経済学 が新たな視角として市民権を得るには、そのひとつの方法として、実証研究レベルでの異説を展開することが考えられる。

49 ページに「少子化」を題材に一部展開されている。 

・ 「家計」、「時間」、「情報」分析を軸にした（人間関係や生活意識などを加えて）トータルに事象を把握する視点か？ 

実証レベルの分析方法を構築していく必要があるのではないか。

4 . おわりに

